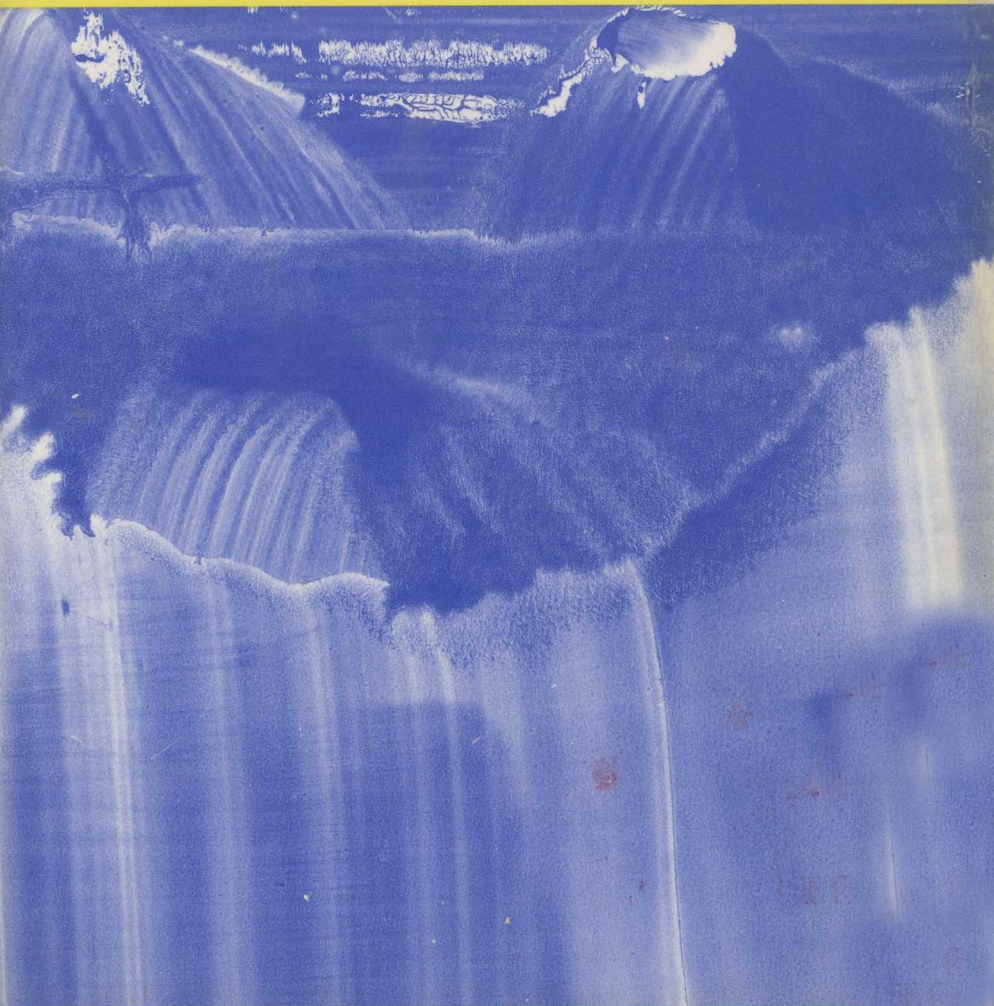


旅とトポスの精神史



メヒコ 歓ばしき隠喩

吉田喜重



吉田喜重



岸とトホスの対峙

岩波書店

メヒコ 飲ばしき隠喻

旅とトボスの精神史

1984年11月19日 第1刷発行 ©

定価 1700 円

著 者 よし だ よし しげ
 吉 田 喜 重

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・法令印刷 製本・三水舎

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-004352-8

目 次

バハ・カリフォルニア半島の洞窟絵	1
ラ・パス監獄の囚人による演劇	31
失語症としての荒野	55
見えがくれする湖テスココ	85
劇場都市テノチティトラン	119
ハチドリ表象と「E」の記号	147
混在郷に棲むアステカの犬	173

父親探しゲームと〈話す機械〉……………199

隠喩としての〈聖母たち〉……………231

幻想の午睡^{シイエス} あるいは飲ばしきインディオ……………257

ある家族の肖像……………297

あとがき……………319

引用文献リスト

バハ・カリフォルニア半島の洞窟絵

さきほどまで退屈しのぎに空騒ぎしていた乗客たちも、ようやく空港ロビーより立ち去っていた。通りすがりの若い男女がその手にした花束から新婚のカップルとわかると、その場の気ばらしに「接吻、接吻」と大声を張り上げ祝福していた連中も、いまはアエロ・メヒコの職員が配るチケットを手にして階下のレストランへ消えつつあった。

向うの壁ぎわで公衆電話をかけているルース・マリアの後姿が大袈裟に動き始める。どうやら電話が通じたらしい。すでに午後二時を過ぎている。掲示された自動時刻表にはアエロ・メヒコ航空のラ・パス行きの欄だけが、「AM 164 8:40 DEMORADO(延期)」と素気なく表示されたまま、もう五時間も停止していた。

わたしは内心フライトが打ち切られればよいと思った。ラ・パス行きは差しこまれた旅というわけではない。バハ・カリフォルニア半島に残る先史時代の洞窟絵を撮影に行くメキシ

コ・チームに便乗した、わたし自身は気ままな旅行者にすぎない。

ふと視線があう。斜め前のベンチに腰かけ、新聞『ウノ・マス・ウノ』に顔を埋めるようにして記事を読んでいたクレメンテが、その度の強い眼鏡越しに曖昧な表情で笑う。こうした事態を諦めてくれとでもいおうとしているのだろうか。彼はわたしにとってかけがえのない情報提供者^{インフォマーント}だった。パリに留学した経験のあるクレメンテはフランス語を話す。この国の言葉、スペイン語を喋れないわたしには、あたかも異文化に接触する文化人類学者に欠かさない重要な情報提供者の役割をクレメンテが果たしてくれていた。向うで電話をかけているルイス・マリアにしてもフランス語を話す。生活様式ではアメリカを志向しながら、知的アイデンティティはヨーロッパにもとめようとする。

はじめてクレメンテに出会ったとき、パリ留学中は社会学を専攻したと聞き、オギュスト・コントの実証主義でも研究したのかと尋ねたところ、この冗談ばかりは通じなかった。それまでの曖昧な笑顔がさつと消え、自分はシェンティフィコではないと強く否定した。メキシコ革命前夜、ポルフィリオ・ディアス政権時代に多くの知識人がフランス実証主義の影響を受け、国家秩序の転覆をはかるよりも忍従して近代化をすすめようとしてシェンティフィコ、科学主義者を標ぼうしたが、現実には反動体制を支えたばかりでなく、エミリアノ・サパタやフランシスコ・ビリャたちが血を流した革命もまた、このテクノクラートたちによ

って内側から空洞化されてしまったのである。クレメンテは社会学者というより、心優しい民俗学者だった。偶然彼とテレビの画面でハリウッド製の西部劇を見る機会があったが、アメリカ・インディアンが太鼓を鳴らしてすすむ光景に、あれは嘘だときびしく非難した。インディアンには聖なる領域と俗なる領域が厳然としてあり、聖域以外ではむやみやたらに太鼓は打たないという。インディアンが奇声を上げながら戦闘の踊りをするのを見ても、宗教的陶醉であるかぎりもつと無秩序な踊りであり、しかも彼等はひとことも声を発しないで踊ったはずだという。

ルース・マリアがわたしの名を呼んでいる。電話に出るよう身ぶりで示していた。「ヴィセンテが呼んでいるのだろう。彼女は撮影所スタジオに連絡しに行ったから」とクレメンテがいう。

わたしが電話に出ると、プロデューサーであるヴィセンテ・シルバ氏の声が雑音まじりに聞こえる。「飛行機はいつ出発するかわからないから、諦めてもどってきてはどうか。Obedezco pero no cumplo. (法律に服しても、実行されるとはかぎらない)」最後の言葉はヴィセンテのいつもの口癖だった。わたしは何故か心にもなく、「もうすこし待ってみる」と答えてしまった。「あなたもメキシコ人のように辛抱強くなった」と、シルバ氏の笑い声が受話器の向うにひびいた。

わたしたちが空港食堂に入ってくと、「モーロ」と声をかけられた。すでにテーブルを

占有していたスタッフのなかから、キャメラマンのミゲルが手を上げている。「モーロ」とは日頃ルース・マリアが呼ばれている名だった。かつてイベリア半島に住みついたアラブ人や北アフリカのベルベル人を指し示す「モーロ」という呼び名は、ルース・マリアの褐色の肌、鋭い眼つき、そして縮れた黒い髪から見て、ごく自然のように思われた。もっとも彼女自身ベルベル人の血が混じっているかどうか知らないという。だが女流の映画監督として現場に立つには、男まさりの「モーロ」と呼ばれる方が好都合と信じている様子だった。

キャメラマンのミゲルはアエロ・メヒコより得た情報として、飛行機の延期はバハ・カリフォルニア一帯に時ならぬ豪雨が降り、ラ・パス空港が水びたしで発着できないからだという。砂漠の半島に雨が降るとは信じられない、とモーロがいう。政府の高官がわれわれの飛行機をチャーターしたに違いない。いまごろはユカタン半島の避暑地コスメールにでも向って飛んでいる、とクレメンテが冗談をいう。

こうした会話を耳にしながら、わたし自身はこの現実が起こりつつある旅とは異なる、いまひとつの旅のことを想像していた。それは現実の裏側に隠された〈内面の旅〉という意味のものではなかった。むしろ外に向ってあくまで開かれた制限のない旅。わたし自身が旅をするのではなく、開かれた世界がこのわたしを旅に誘いこむ。「われらが思い至るのではなく、思いがわれらに来る」と語ったハイデッガーの言葉のように、思う主体としての〈わたし〉と

「世界」との関係が反転するのだ。それも歓喜に充ちて、というべきだろうか。

いま試みようとしているラ・パスへの旅にしてもそうだ。あと何時間待てばバハ・カリフォルニアの南端ラ・パスの街に行きつけるというのだろうか。「誰が知ろう?」メキシコの人びとの諦めの感情を表わすこの言葉が、いまのわたしには限りない自由への徴しとして軽やかにひびく。「世界」がわたしを呼ぶのであれば、待たされるのは当然であつたろう。もっともこのばあいの「世界」とは前人未踏の処女地などではなく、かつてデカルトが書物としての学を捨て、「世界という大いなる書物」に向つて旅を試みようとした、あの世界のことであり、スペインの劇作家カルデロンがいう「劇場としての世界 El gran teatro del mundo.」そしてシェイクスピアがみずからの劇場、地球座の入口に「世はあげて俳優を演ず」と掲げたように、まさしく人間がかかわりあう「世界」のことである。

だがさきほどシルバ氏と電話でかわした会話のなかで、わたしが心にもなく「もうすこし待ってみる」といった言葉に、いま後悔がなかったわけではない。世界がわたしを誘いこんでくれるのはいい。世界に抱擁されていることの限りない歓び。しかしそのためには肉体のばげしい消耗がともなう。メキシコという広大すぎる大地、そうした空間の重圧だけではなく、この国が過去に経験させられた歴史、その屈折した時間を溯行してゆこうとするなら、相当の肉体労働を覚悟しなければならない。それはあの呪われた作家セリーヌがみずからの

作品『夜の果ての旅』の冒頭で次のように語った旅とはまったく対照的であつたろう。

僕の旅は完全に想像力のものだ。それが強みだ。

それは生から死への旅だ。ひともの、けものも、街^{まち}も、自然も一切が想像のものだ。

これは小説、つまりまったくの作り話だ。辞書もそう定義している。まちがいない。

それに第一、これはだれにだってできることだ。目を閉じさえすればよい。

すると人生の向う側だ。

もちろんセリーヌ自身、現実の旅をしなかったわけではない。医師としてアフリカの奥地に赴任した経験をもつ。そこで見出したものはブルジョワジーへの憎悪、自己欺瞞的ヒューマニズムへの嫌悪であり、それが反ユダヤ感情へと高まる。セリーヌほど新たな憎悪の火種を探しだすために旅をした人間もない。彼と世界との関係は閉ざされており、おぞましい眼差しで世界を見ることはあっても、世界が彼を見ることはない。想像力による上昇の旅はやがて失速する。戦争末期ナチス・ドイツへの亡命、さらにデンマークへの逃避はいわば想像力による旅が現実の旅そのもののリアリズムによって、痛烈にしゃべ返しを受けたようなものである。それは世界をすべておのれの意識によって想起された表象としてとらえ、それを自負したことに原因があつただろう。いまここでいう「想起された」表象とは、プラトンが『パイドロス』篇のなかで人間が文字を発明した愚かさを笑ったあの挿話から得ている。

古代エジプト人は文字を発明したおかげで、魂のなかに記憶したものよりも、自分以外のものに刻まれた徴しだけを信じ、それを読みとるだけの想起ヒニボムネシスの人間に失墜したという。セリ―ヌもまた人間への憎悪という自動記憶装置と化し、文字にかぎらず言葉までもが想起された表象として、しかもみずからの内部にあつて自由にあやつれると考え、あのような呪詛的なおぞましきで語りつづけたのである。しかし言葉はわたしたちの内や外にあるのではなく、前にあるというべきだろうか。〈意味するもの〉と〈意味されるもの〉とがたえず〈ずれ〉あい、記号としての言葉と伝達しようとする意味内容とのあいだには越えがたい差異がある。わたしたちが容易に諒解しあっていると思う意味内容それ自体にしても、それを追求すれば曖昧に浮遊し刻こくと去りゆくものであり、やむをえずそれを記号で規定するとき、意味は変質し脱落してしまう。そのかぎりでは言葉とわたしたちとの関係は、記号によってかろうじてそれらしく意味内容を模像シミュレートしているにすぎない。だがこうした言語表現のまやかしに絶望することはないだろう。〈意味するもの〉と〈意味されるもの〉が完全に一致するのは情報伝達としては理想だろうが、文化における全体主義の脅威でもあっただろう。むしろ言語表現のもつ曖昧な〈ずれ〉によって、わたしたちがみずからそれらしく模像シミュレートするからこそ、創造のための余白がそこに生まれる。

ハイデッガーが好んで引用する「われわれは世界を前にして立っている」という詩人リル

ケの言葉もまた、人間と世界との隔たりを鋭く問いかけたものであったろう。無心に生きる動物のようにもはや人間は世界のなかに存在しえない不幸な故郷喪失者であり、「われわれはわれわれの意識のとった独立な方向と意識の高まりのために、世界を前にして立つ」しかない。このわたしたち人間の疎外状況は、〈意味するもの〉と〈意味されるもの〉との限りない〈ずれ〉と見あっており、ハイデッガーのいう意識の本質としての表象作用は世界と人間とをたがいに対象化するものではなく、たえず新たな意味形成^{シニフィアン}をめざす、模倣、シミュレーション^{シヨ}の場として読みかえられるべきではないだろうか。

そしてジャック・デリダは〈差延 difference〉という言葉によって世界と人間との隔たりを空間としてだけではなく、時間の〈ずれ〉としてもとらえようとする。〈いま〉という生きられた現在と過去とを隔てるものは、過去において徴しづけられた刻印を読みかえすことであり、この遅れて読むことの行為の〈ずれ〉が時間を生みだす。わたしたちは世界のなかではなく、あくまで表層に宙吊りにされている。危なっかしくともこの平衡感覚を失っては意識の過剰な迷路に落ちこみ、世界との豊饒な関係性をもちえないであろう。いまわたしが試みつつある、この旅のエクリチュールにしてもまた危険な綱渡りであり、世界と表象とのきわどい戯れであったろう。

ラ・パスへの旅は軽く目を閉じれば想像力によって一瞬のうちにたどりつけるような、生

やさしいものではなかった。メキシコ市空港を発ったのが夜の九時過ぎ、丸半日遅れの出発であった。ジェット機で一時間五十分の飛行、メキシコ市とバハ・カリフォルニアとのあいだには一時間の時差がある。深夜のラ・パス空港はたしかに雨に濡れて誘導灯がにじむように光っていた。吹く風は湿気を重くふくみ、海が間近なことを告げる潮の匂いがした。その夜はホテル、エル・プレシデンテの一室で熟睡した。疲労もあったからだろうが、それ以上に空氣の稀薄な高原都市から海辺の低地に降りてきたおかげで心地よく眠れたのだろう。

翌朝クレメンテが運転する車で半島の南端サン・ルーカス岬へ向った。予定ではセスナ機でバハ・カリフォルニアを南北にわたる州境の街サンタ・ロサリーヤへ一時間の飛行をするはずであった。メキシコ・チームが撮影しようとする先史時代の洞窟絵はさらに奥地へ、ヘリコプターで飛んだサンタ・テレサの深い溪谷にあった。だがモーロたちが知りえた情報によれば、前日の豪雨のため溪谷は増水し、ヘリコプターの発着はおぼつかないという。洞窟絵があるサンタ・テレサは近くに牧場がひとつあるだけの辺境であり、現地の様子を知るには現地と無線で話しあうしかない。モーロとミゲルは牧場と交信するために空港へ行くことになった。残ったクレメンテは無駄に一日を過ごすよりはと、わたしをサン・ルーカス岬へのドライブに誘ってくれた。真冬であればクジラの群れが沖合いで出産する珍しい光景が見られるのだが、という。一度目撃した彼には、出産する雌クジラの声がまるで人間の泣

き声のように聞こえたという。

すでに二時間、車を走らせつづけていた。改めてこの国の広大な大地を思い知らされる。涸れた沢にはところどころ水が澱んでいたが、荒野にはメスキタルの低い灌木が広がり、ノバルと呼ばれるサボテンが点在する。サボテンには二種類あり、丸く分厚い葉茎のものは先端にトウナという食用になる果実をつけるが、いまひとつの別種は丈高く柱状にのびるだけでなんの役にも立たず、荒野に孤独にたたずみだけである。こうした風景が幾時間もつづくことに、ただじつと耐えるしかない。南米の大草原^{パンパス}に育った詩人シュベルヴィエルが語るように「絶望的なまでに疾駆しても地平線がいつになってもかわらぬために、この草原が他の牢獄よりもはるかに大きな牢獄の相貌」をいまあらわにするのである。

あと十五キロほどで岬に到達するという地点まで来たとき、ようやく果てしない荒野の牢獄から解放された。前方のハイウェイに長蛇の列をなして車が立往生している。渋滞の原因は洪水であった。昨日の豪雨による濁流が道路を断ちきり、とうとうと流れていた。牧夫^{パストラー}たちが馬を駆って流れに乗り入れる。放牧されていた馬や牛がおびただしく流されてゆく。それを救おうとして男たちは投げ縄をかざしながら濁流に挑む。それは何故か創世記に語られる、大洪水を前にしたノアの箱舟を白昼まのあたりにするような光景に思えた。

エル・プレシデンテの食堂は人影も疎らだった。庭のプールには少年がひとり、アクアラ